

截金

截金（きりかね）とは、極薄の金や銀などの金属箔を切り取り、木などの素地（下地）に塗布して、微細で複雑なパターンを形成する装飾技法である。もともと截金は、仏像の衣や鎧の装飾に多く用いられていた。日本には飛鳥時代（552-645）にアジア大陸から渡来したが、8世紀から14世紀初頭にかけて最盛期を迎えた。

江戸時代（1603-1867）には、より早く簡単に塗れる金泥に取って代われ、截金は使われなくなった。一時は京都の東本願寺と西本願寺にしかその技術が残っていないほど廃れてしまった。第二次世界大戦後、宗教の枠を超えて、茶道具や美術品などの工芸品に施されるようになり、復活した。

金箔は息がかかると破れてしまうほど繊細なため、職人が何枚も重ねて補強する。竹製のピンセットを使って、箔に付着しないように、また静電気を帯びないように、何枚も重ねていく。このとき、箔は熱せられた灰の上に置かれ、重ね合わされた箔が他の箔と密着するのに十分な熱を持つ。何層にも重ねた箔が十分な厚さになったら、鹿革の裁断台に移し、竹刀で髪の毛よりも細く切っていく。鹿革が薄い箔を固定し、かつ剥がすときにくっつかないようにするためだ。

帯状にしたものを下地に貼り付けるには、特殊な接着剤を使用する。糊は、海藻を原料とする「布海苔（ふのり）」と、動物の皮を原料とする「膠（にわか）」を混ぜ合わせたものである。職人は両手に筆を持って、帯状の箔を貼っていく。1つは、先端を水で湿らせた筆である。職人が箔の端を巻いて、裁断台から浮かせる。もう一本は、糊と水を混ぜたもので湿らせた筆である。これで箔を下地に乗せると同時に、表面に接着させる。

截金で重要無形文化財保持者に認定されたのは、これまで3人しかいない。石川県にはその一人、西出大三（1913-1995）は1985年に認定された。彼は仏教美術の修復を学ぶ中で截金に出会い、熱心に研究して独学で技法を習得した。その後、截金を自身の木工芸に取り入れた。当館には、色とりどりの金線と花びらで動物の容器全体を覆い尽くした截金作品など、数点の作品が収蔵されている。

截金は1981年に重要無形文化財に指定された。